

## 2 園芸作物

### (1) 野菜全般

経営費に占める燃油、肥料、被覆資材、出荷ダンボールなど資材の割合は野菜の種類や栽培様式によってかなり異なる。あらゆる観点から生産方式を見直し、コスト低減に努める必要がある。

特に、加温施設の省エネ対策、露地野菜の施肥方法、出荷経費が重要であるが、作付面積・作付体系や機械化・雇用の適正規模等の生産性の向上に関わる要因についても検討する必要がある。

#### <野菜の生産コスト>

・燃油だけでなく肥料、被覆資材、出荷ダンボールなど多くの生産資材が高騰し、経営を著しく圧迫する事態を招いている。野菜類の経営費に占めるこれら資材の割合は野菜の種類や栽培様式によってかなり異なる。施設栽培では何と言っても暖房コストが占める割合が大きい。露地野菜の生産コストは施設野菜と比べると小さいが、肥料やダンボール箱、輸送コストの等の値上がりは深刻である。

・経営規模や販売形態等によっても資材高騰の影響に差異があるので、あらゆる観点から生産方式を見直し、コスト低減に努める必要がある。

・省力化、規模拡大および共同化による経営コストの面からも、収益性の向上を図る必要がある。

#### <加温施設栽培における省エネ対策>

・ピーマン、トマト、キュウリ等の果菜類およびオオバ等の加温施設栽培では、暖房用燃油の負担が非常に大きい。万全の省エネ対策を講じる必要がある。

【参照】 2 施設園芸における省エネルギー対策

#### <施肥方法の改善>

・大規模露地野菜では肥料代の経営費に占める割合が12～15%と大きい。近年、施肥技術が進歩しており、自家生産および市販の堆肥を利用して化学肥料の使用量を削減したり、局所施肥技術を取り入れる事例が多く見られるようになってきている。

・トラクタ装着型の溝施肥機はネギ等で効率的な施肥を可能にすることが明らかになっている。

・施設果菜類では肥効を高め、施肥量を30%程度削減できる養液土耕栽培が注目されている。

【参照】 3 肥料費の低減策

#### <経営面からの改善>

・栽培する野菜の種類・作型、経営規模、機械化、雇用、販売先・流通形態等、経営面からの検討も生産コストの縮減に不可欠である。とくに、機械化・規模拡大による単位面積および単位時間当たりの収量性の向上は、結果としてコスト縮減効果が期待できる。

【参照】 1 経営面からみた縮減策

#### <その他>

・電照コストの縮減：イチゴ、オオバなどの電照栽培においては白熱灯を蛍光管や発光ダイオードに替え、また、電照時間・強度等を見直すことなどにより電気代を縮減することができる。

・出荷経費の縮減：規格の簡素化や通いコンテナ、茶箱出荷ダンボールの利用、共同の出荷・販売等により、出荷経費を縮減することができる。

・低コストハウスの利用：建設費が従来の鉄骨ハウスと比べて30～50%割安な低コスト・超低コストハウスが開発されている。また、作業性や換気効率等の点で優れ、最近注目を集めている高軒高ハウスは暖房効率の点では劣るが、生産性が高いことから導入を検討する価値がある。

・化学農薬の削減：防虫ネットやマルチ資材、太陽熱土壌消毒等の活用は化学農薬を削減し、効率的な防除体系を構築する上で有効である。